昭和62年３月１日発行　（財）高知市文化振興事業団

文化高知 16

情報化により距離の克服を

杉本 价寛

三十一年ぶりに故郷へ帰り、高知で勤務することになって半年余りが経過した。「チュー、チュー」「ニャー、ニャー」と、まるで鼠と猫の会話のようだと誰かが言った土佐の方言も、このところ耳につかなくなった。

着任直後の燃えるような昨年の夏、若者を中心とする情熱のカーニバル「よさこい祭り」に参加し、追手筋のメイン審査場前で首に大輪のメダルをかけてもらい歓喜したり、師走に、連日連夜忘年会がつづき、身体が粕漬けになりはしないかと心配したりしているうちに、二年目の春を迎えた。

早いもので、今年はＮＴＴが誕生して三年目になる。言うまでもなく、電電公社の民営化は、電気通信事業に競争原理を導入しようとして行われたもので、既に電話機市場では、色とりどりに各社の瀟洒な商品が競い合い、従来の黒電話一色といった状況は様相を一変している。また、新規通信事業者についても、昨年八月一日に日本テレコムがサービスを開始したのを皮切りに、第二電電、日本高速通信などが続々と営業を始め、専用線の分野において既に競争状態に突入している。今秋からは、これらの事業者が一般のダイヤル回線の部分に参入してくることになっており、いよいよ本格的な電気通信の自由化時代を迎えることになる。これによって、わが国は今後二十一世紀に向かって、社会の情報化が加速度的に進展し、社会は創造的に変貌をとげていくことになるだろう。

桑尾寿秋

わが高知県においても、地域の情報化計画は、県をはじめ多くの関係者のご努力により、既に、ＫＩＲＩＮ計画、グリーントピア構想などといった形でその導入の準備が進められている。中でも、高知地域（高知市、南国市、伊野町）を対象とした、卸流通・商店街情報システムについては、本年度通産省のニューメディア・コミュニティ構想の地域指定を受け、今後に最も期待されているところである。

僻遠の地高知県が、今後ますます経済的、文化的に成熟していくためには、高速道路など交通網の拡充整備と合わせて、情報化の促進が最も重要な課題であることは言をまたない。

今や、経済、文化に関する重要な情報は、年を追って中央に集中していく傾向にある。地域における情報化を通して、通信ネットワークを有効に活用していくことにより、中央との距離を一層克服していかなければならない。

そのためには、ただ単に行政に期待するのみではなく、各人が自らの問題としてその重要性を認識し、民間の活力を生かして、地域における情報化を推進していかなければならない。

ＮＴＴは今後とも、電気通信事業者の一員として、そのインフラストラクチャー構築のために変わらぬ努力を続けていきたい。

（ＮＴＴ高知電報電話局長）

知的能力の可能性を追求する

公文　公

昭和三年アムステルダムでオリンピックが開かれた年のことです。当時私は土佐中学の三年生でした。陸上競技や水泳などに、「世界記録」というものが存在することを初めて知り、一種の感銘を覚えたものです。これは人間の体力の可能性の記録であるといえますが、その当時、私は一つの疑問を抱きました。それは、肉体的能力の面で世界記録があるにもかかわらず、なぜ知的能力の世界記録は存在しないのだろうか、ということです。人間の知的能力がどこまで伸びるかは、いまだに解明されていないといっても過言ではありません。スポーツ界では記録がつぎつぎに破られて、運動能力向上の可能性が証明されているのに比べると、知的能力を伸ばす教育の面は、随分遅れをとっているといえます。

公文式教育の仕事を始めて二十九年間、私たちは子どもの能力を伸ばすのは教育の仕方しだいであると信じてやってきました。悪いのは子どもではなく、指導する側にあると肝に銘じて教材を作成し、指導に当たってきました。その結果、旧来の教育常識を打ち破る事例がぞくぞくと生じるに至りました。

たとえば、公文式を取り入れている佐賀県立の精神薄弱児施設では、知能指数測定不能といわれた子どもを含めみんなが意欲を持って、自分から公文の学習に取り組み、学校の授業でも積極的になってきました。

当初の目標としては、日常生活に困らない程度になればよいと考えておられたそうですが、今は、「数学は方程式だってできそう」「国語は大人向けの本も読めそう」「英語もやりたい」と園児の要求はどんどんエスカレートして、職員の方は嬉しい悲鳴をあげているそうです。

このように〝この子にはどの程度のものをさせるか〟が教育には大切なことです。その子の能力に〝ちょうど〟のところであれば理解して進むことができます。しかし、その子の能力以上のことを無理にさせると、弊害が生じます。私たちは、ひょっとして進ませすぎて何か弊害は生じていないかと、子どもの様子をいつも確かめながら、慎重に指導してきたのです。

その結果、記念すべき新記録として九年前に初めて、自学自習で方程式をとける幼児が出現しました。その数も昨六十一年には三百三十三名になり、本年はその二倍程度の幼児たちが、方程式以上の数学を学習できるようになることはほぼ確実となっています。今後その数が一万人になるのも不可能なことではないと思っております。

さらに、幼児で高校の微積分まで終ってしまった子どもが五人、英語でも幼児で原書の『マクベス』（Charles Lamb の Tales From Shakespeare）を読みこなし、国語においても、遠藤周作の『沈黙』や夏目漱石の『こころ』を読んで内容を要約できる幼児が毎年増えています。また、指導技術が上がるにつれて、中一程度の方程式を学習できる年齢もだんだんさがってきており、現在では「三歳二ヵ月」が最年少の記録となっています。

マラソンの世界記録と方程式の最年少記録とどちらが値打ちがあるかと問えば、「九十九対一」でマラソンの方が上であるといわれるのが現状だと思いますが、二十一世紀に近づくにつれて、その比率は「五十対五十」に高まってくることを信じています。

学年よりかなり先の内容を学習できるようになった子どもたちをみると、自分で学習していく姿勢が身についているだけでなく、集中力や意欲、根気、挑戦力、好奇心などが培われ、他人への思いやりなど、人格的にも幅広く向上していることがわかります。

子どもの知的能力の世界記録を今後も伸ばしていくことが、二十一世紀へ向けての私たちの大きな役割であると信じている次第です。

（公文教育研究会会長）

私の風景

勧進橋あたり

上町５丁目の電停の北、江ノ口川と旭川の合流点。北の井口橋、東の小高坂橋とともにリズミカルな手摺の勧進橋は〝普段着のまま〟の下町の風情を漂わせている。

島　総一郎

写　真

大崎二郎

張　金蘭
①女　②二歳　③鶏寧県　④ソ連参戦後、東安省鶏寧県東麻山西大波の畑の中の小屋で中国人に保護された。右腕、首、頭部に傷跡。

言うまでもなく、中国残留日本人孤児の訪日調査の新聞にのった顔写真である。見開き二頁に百名の顔がびっしりと並んでいる。

これはその中の任意の一枚、写真に付されたこの女性の戦後の四十一年間は、右の通りたった四十八文字で語られている。

四十八文字は言葉となって迸ることなくせきとめられたままだ。

県外に住む娘が二歳になる孫娘を連れて帰ってきた。その二歳は遊び疲れストーヴの前で眠ってしまった、妻はそっと抱きあげて寝床に運ぶ。私はその柔らかな寝顔の上に

張　金蘭、その二歳の顔を重ねてみる。

そうすればわかる、ことの意味がわかりはじめてくる。

闇の中、銃声や、ソ連兵の喚き散らす声、悲鳴や、腥い風の音まで、いまハッキリとこの耳に聞こえてくる。あの時血まみれになってこの子は火のついたように泣きながら真暗い畑の中に放られていたのだ。父は殺されたのか、母親はいたのか？　何にもわからない……。

その写真の脇に一段小さく少女期の写真がある。

髪を飾り、愛らしく、きちんとして。

中国にいた私にはわかるが、貧しい向うの田舎に写真館などあろう筈はない、だから遠くの町まで養父母が連れて行って写したものに違いない。

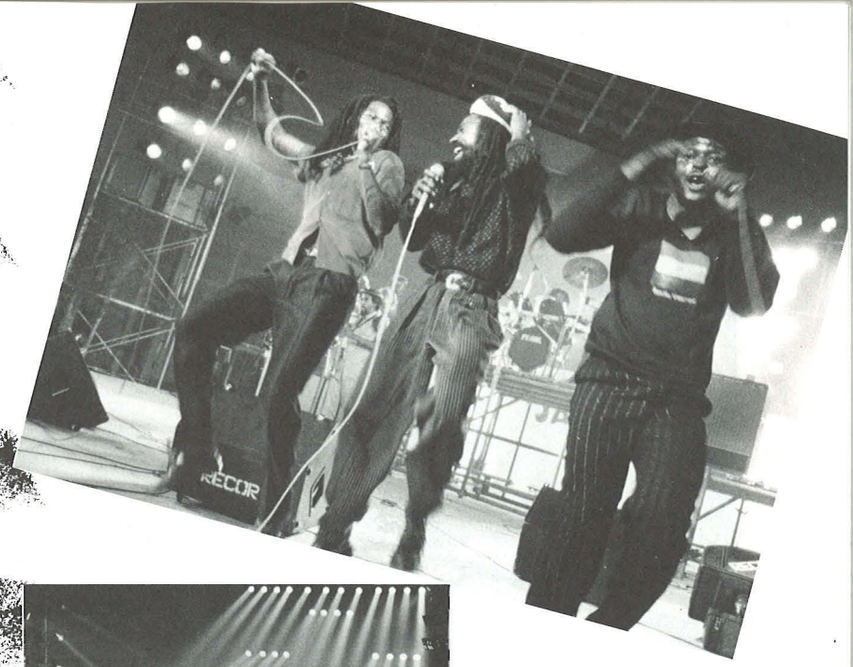
その写真の背後の空白に、養父母の注いだ愛情が滲むようにうつっている。

そういう写真が百、ここにある。

（詩人）

これはもう民営で何でもできるニューホールが必要です。

長野恭三



昨年12月７日、ぢばさんセンターでレゲエ・ミュージックの公演が行われ、大勢の若者が集まった。

イベント、イベント、毎日イベント

イベント、この言葉が氾濫し始めてなんか随分たちます。モノを並べているだけで売れた時代が過ぎて、事件、事象を起さないと人が集まらなくなって、イベントがあふれだしたのです。

でも、人の顔見りゃ、「おい、何かイベントやってくれや」というあの態度には頭がおかしくなります。だってイベントというのは、私ひとりがそう決めて、自分でやってみたところで全然しょーがない部分があって、やっぱりお客様とか、社会に対して何か働きかけがないと、こりゃ営業上不都合をきたす。超前衛的パフォーマンスが、イベントと呼ばれない訳であります。ところがパフォーマンスという言葉も、プロレスの実況放送などでどんどん使っているのですから、何か行為につける呼び名を又、捜さないといけない。

ただ、このイベント、催し物、の質が、今変化してきている様に思います。

レゲエの公演が、なぜ成功したのか

さほど、知名度があると思えない。製作期間も三カ月もなかった。貧乏人の集まりで催された、レゲエの公演（昨年十二月七日）。ところが、ぢばさんセンターに車の便で、三千人が集まった。

なぜだか分りますか――自由だったからです。本年一月十日付の高知新聞のコラム「閑人帳」に『レゲエ賛歌』という記事が掲載されていましたが、要旨は、冷たい飲み物があり、温かい食べ物があり、子供を抱いた父親があり、異文化と接する。そんな機会がすこぶる楽しい経験であったということでしたが、主催者として、この記事に接した時、「あ、何かが変ったな」と思ったのでした。私どもの目的はただひとつ、気軽に集まれて、リラックスして聴きたい。不遜な事に自分がお客様になって考えておったのです。もとより、それほど人が集まると思ってもみなかった（大方の予想はたいへんな赤字でしたから）。楽しむ事を中心に考えたのです。すると、県民文化ホールなんかの使いにくさがすごく見えてきた。

お腹をすかして聴くコンサート

平日の午後六時すぎから始まるコンサートに、お腹をすかして聴きに行く、これ絶対、へんです。楽しみに行くのに苦行を連れてゆきます？僕のお腹は、空いたら鳴ります。だから午後六時から始まるコンサートなんて時は、どうしてもいかなければ一生の不覚か？　食事を家族とする事とどちらが重要か、およそ二日はかけて考えて悩んで、結局、行かない方が多くなりました。

これが八時から始まるのなら、私はきっと家族そろって行くでしょう。私の娘たちは、ロックのどんなに大きな音量でも平気で寝ますし、たいくつな公演でも、やっぱり寝ます。ま、それなりに見方、聴き方はあるんですが、大前提、行かなければしょうがない。

この六時すぎの開演の理由、これは交通の最終便のせいではありません。ぢばさんセンターの三千人は終演九時半だったけど、みんな勝手に帰った。布師田からですよ。

これ、つまりひとえに県民文化ホールのホールアウトの時間制限の為なんです。その上食べては駄目、飲んでは駄目、踊ったらダメ、――こんなの音楽の楽しみ方ではない。パリのオランピア劇場では、バーもあります。カフェもあります。肩組んで劇場内かけまわります。ロンドンのロイヤルアルバートホールでもそうです。いろんな性格のホールがあってもいいが、いまや〝楽しみ方〟によって、ホールのあり方を考える時期が来ていると思う。

催物の質が変化している

劇場は箱である。

もとより歌舞伎、日本舞踊から、シェイクスピア、オペラ、クラシック、現代音楽までを収める変容する箱としての劇場は個性を持たない。余分なものを一切取りはらい、規制や制約のない民営の箱が、今、本当に必要だと思う。いわば、ジャズクラブの様な、小粋なショーのあるキャバレーの様な、アミューズメントを、楽しむ事を、気持の良い事を、前提にした劇場が欲しいと思う。

おそらくこれは、今後十年の高知の文化を根本的に考える上の最重要事項の様に思う。（プランナー）

読書と私

井上　綾子

空気がピーンと肌をさすような寒いなか、梅の花がほころび、春はしのび足でやってくるようです。町角の本屋さんの前を通りかけると、誘い込まれるように入ってしまう私。情報化時代と言われる昨今、さまざまな本が溢れるように書棚に積まれています。

お金さえ出せば、欲しい物が何でも手に入る時代に、今の子供達の活字離れを考える時、果して心まで満たされているだろうかと思われます。勉強だ、塾だと追い回わされ、その隙にサバイバルゲームやテレビゲームに熱中する現代の子供達。物事をゆっくり思考する時間さえない程に、社会情勢がスピード化しているような気がしてなりません。

私の小学校時代の楽しみといえば、ラジオを聞いたり本を読むことでした。宿題もそこそこに、学校の図書館で本を借りてきては読んでいる私に、母は「勉強はしたか？」と一言も問いませんでした。今思えば嫌いなものは、口やかましく言っても無駄、好きな本でも読んで、その中に一つでも光るものを見つければ良いという、気長い親心だったようです。今私が果して受験を目前にしている息子に、そのような広い心で接しているだろうかと反省させられます。

社会人二年生の娘も中三の息子も小さい頃から本は好きで、童話や絵本を読んで育て、外出の時にオモチャやお菓子は買ってくれなくても本は別と、親の心理を巧みに掴み、よくねだられたものでした。子供も親離れをし、読みたい本は自分で買ってくるようになると心淋しくなつかしい思い出です。

子育ての最中は思うように本は読めず、もっぱら積読でした。やっと自分の時間が少し持てるようになっても雑用に追われ、職場の昼休み、家事の合い間に、切れ切れの時間をつなぎ合わせるように乱読しています。

数年前から、市民図書館の読書会に参加して、色々な人々の読書に対しての考え方、生き方を学びながら一期一会のひとときを大切にしています。老眼鏡というやっかいな相棒が必要になっても、日々の終りにスタンドの明りの下でする読書は、私にとっての清涼剤でもあり、安眠の元となってくれる事でしょう。

（主婦）

失われゆく文化 三

風景にいのちを

猪野 睦

風景論はむかしからあった。風景の発見、その賛美であるが、明治二十七年にでた志賀重昂の『日本風景論』にも、高知がよくでてくる。四万十川や魚梁瀬や龍串、野中兼山開発の「溝渠運河」、つまりいまでいう農業用水路などが、日本風景のなかでほめあげられてきた。

とくに四万十川などは、「汪々として湖水の如く、幅或は二十町、深サ時に十尋、中に白渚青嶼ありて、煙霧杳溟」というぐあいにその風景は絶賛されてきた。うっとりする四万十川情景がただよってくるものだった。そしてその岸のかなたに、見えかくれしてけぶる人家に、明治中期の人と川のくらしの息づかいも伝えてきていた。

いまこれらの風景は志賀重昂の『日本風景論』から百年近いなかで、よごれ、荒れ、変ってきた。むろん時代とともに世もすすみ、風景も昔のままというわけにはいかない。ところによっては、野中兼山構築の山田堰のように原風景がすっかり消えてしまっているところもある。

風景は文化

日本最後の清流といわれ、大きく名の浮かび上ってきた四万十川もそれなりに変ってきた。もう数年前になるが、四万十川のほとりで少年時代をすごした人の話をきいたことがあった。昭和十年前後のことだった。

小学校のかえりに四万十川にそって歩く。夕暮どき、とつぜん近くの草原がざわめき、けものが走り、どぼーんと大きな音がして川にとびこむ。大きなカワウソが少年の足音におどろき逃げていく音だった。日常光景であったが少年にとってはこわい音だったらしい。いま日本最後の清流といわれる四万十川からも、とっくにカワウソは消えた。ここでも気づかぬまに荒廃はすすんでいるのだった。

志賀重昂は『日本風景論』のなかで、日本風景の保護を論じ、風景は日本人の審美心を涵養する原力とうったえ、木の濫伐や風景の破壊に警告を発してきた人だった。風景がいかに人間をそだてあげていく文化のひとつであるのか力説者といってよかった。

荒れていく川

ここ十年二十年のあいだに多くの風景が変った。いや荒れ、ほとんど殺されてきたといってもいいすぎではない。川ひとつとってみても、四万十川のみが清流として浮かび上っているが、奈半利川、物部川、鏡川、仁淀川、いずれも四万十川におとらぬそれぞれの名川であったことを多くは知っている。

いま川で驚くことのひとつは、ほとんど川原がなくなっていることである。以前は水に洗われる丸石が岸辺につづき、月光に光り、日中は太陽光線を反射して輝いていた。清流が石を嚙みみがき、洪水が石を押しころがして砕きまるめ、川原を作っていた。川は漁業や製紙原料をさらして暮しをたてていく場であり、川がつくりだす風景は、人の心をなぐさめ勇気づけていくものであった。志賀重昂のいうやさしい「原力」が川にはあった。いまダム下流の川は、乾いた泥をこびりつかせた石原であり、人をいざなう力を失ってきている。

川が川としての価値を失っていくとき、人は川とともに風景も見捨てていく。それがどれほどの文化の喪失であるか。清流ぞいにそれを眺める価値があるから人も住みついてきた。いまおそらく、その川ぞいに住むよろこびも消えていっているのではないか。風景がもつ「原力」をあまりにも忘れてきたのではないか。

仁淀川橋付近の風景（撮影・小林勝利）

農村美の再生を

農村風景も変った。ビニールハウス連棟群は、それでひとつの新しい風景である。だが開発、公共事業がときには過剰、飽和、限界といったところまでゆき、それが農村部にもおよぶ。耕地整備があり、公共事業がすすむなかで掘り返されていく姿を十年近くみてきた。

さいしょは整備工事中のいっときの荒れ、とりこみ中の混雑というふうにうけとってきた。整備がすめば、整然とした農村美がかえってくると思っていた。だがさいきんでは、それに耕作放棄や宅地化待ちも混じって修復された姿にもどりにくくなってきている。日本風景のこれまでの原点とみなされてきた農村風景のこわれていく損失は、景観上からみてもどれほどのものになるか。すくなくとも土地は耕やされ、作物が整然と育っているという農村原風景に復帰していくことが、生産上からも国土保全上からもどれだけ大切なことであるか。

風景文化を次の世代へ

風景が文化であるという認識はたかまってきている。自然保護、景観保護のなかでかけがえのない風景を再生していこうという動きである。リゾート・ゾーンという耳ざわりのよい言葉もきこえてくるが、これがねらうのはいずれも、最後といっていい価値のある自然が残っているところである。その価値をどう文化として守り、あとの世代にわたしていくか、いまそれが問われていると いっていい。

志賀重昂の『日本風景論』からおよそ百年、周辺の風景はあまりにも無残ではないか。

（了）

（詩人・高知ペンクラブ事務局長）

高知市近代年表（四）

明治二十年（一八八七）

3・1 坂本直寛宅で民権派の婦人組織「婦人交際会」が発足（県下最初の婦人会）

4月 この頃鹿鳴館で舞踏会が頻繁に開催される

5月 高知（本町五丁目）―伊野間に馬車開通（一日三往復）

6・1 高知郵便電信局開設（郵便局と電信分局合併）

7・1 小学校規則実施（尋常と高等に分かれる）

10月 高知県代表が三大事件建白書（地租軽減、言論集会の自由、外交失策の挽回）を元老院に提出

12・26 保安条例施行（高知県人二十一人投獄、二百三十三人東京より放逐）

明治二十一年（一八八八）

1・15 大阪で『東雲新聞』創刊（中江兆民主筆）

1・29 高知県会、植木枝盛提出の公唱廃止建議を可決

5・1 高知測候所を稲荷新地から高知公園二ノ丸に移転

6・1 後藤象二郎、大同団結の機関紙『政論』創刊

10・26 書籍館を高知図書館と改称

11・1 馬場辰猪、フィラデルフィアで客死（三十九歳）

11・12 牧野富太郎『日本植物志図編』第一巻第一集発刊

◇この年、オッペケペー節上演

明治二十二年（一八八九）

1・1 海南学校を県立中学校とする

2・21 大日本帝国憲法発布、片岡健吉ら二十人が大赦により出獄

3・22 後藤象二郎、逓信大臣として入閣（大同団結分裂）

4・1 高知市制施行（初代市長・一円正興）、県下に町村制施行（一市七郡二町百九十四村）

9・3 川田小一郎、日銀総裁に任命

9月 植木枝盛『東洋之婦女』刊

11・24 大隈重信の条約改正案に反対する香美郡自由大懇親会開催、杉村作女史演説

明治二十三年（一八九〇）

1・18 高知県婦人会が堀詰座で風俗改良大演説会を開催

3・31 県立農学校を北門筋に設置

5・24 再興自由党、大同倶楽部、愛国公党が合同（庚寅倶楽部）

5月 種崎に三業組合（造船、廻漕業、船具用材販売）設立

7・1 第一回衆議院議員選挙（片岡健吉、林有造、竹内綱、植木枝盛当選）

9月 海南倶楽部解散、海南社組織

9・15 立憲自由党組織

10・20 第二次『自由新聞』創刊

◇この年、高知県汽船会社設立

高知―阪神間に高知丸就航

明治二十四年（一八九一）

2・21 中江兆民、衆議院議員辞職

2・24 林有造、植木枝盛らの土佐派、立憲自由党を脱党（三月に自由倶楽部結成）

3・19 立憲自由党が自由党と改称

5月 水曜市開設許可（本町西一丁目）

7月 九反田に合資会社青物市場開設

8・17 高知商業会議所設立

9月 九反田に魚市場九十九株式会社設立

10月 天理教高知教会設立

感寸

北村宗三郎
（文とカット）

昨年の秋、大阪の友人の家で夕飯を御馳走になった。友人はみやげにもらったとかで、ブランデーを出してきて、これは六万円位するらしいがねといった。「これはすごいね」と二人で楽しく飲んだ。友人はコニャックの知識を一くさり述べてから、二十万円もするブランデーを先日飲んだという話をして私を驚かせた。昔海外に行った時、五千何百円かで、ナポレオンを買ってきて、天下をとったような気持で、皆にふるまったことを思い出した。それが最高のブランデーだと思っていたのである。

日本もずいぶん変った。この半世紀の間に、日本は何世代の間に起るよりも多くの変転があった。物質的な豊かさが、日本中に満ち溢れ、都会はビルが立ち並び、田舎の山奥まで舗装された。街には商品が沢山積まれ、飲食店は軒をつらね、どんな小さい居酒屋でも正真正銘の日本酒が飲める。

昔、その友人と大阪の梅田の闇市で一杯二十円のアルコールを飲んだ。なけなしの金をはたいて、アルコールを薄めた一杯二十円。ひどい時代であった。それでもコップをカチンとあわして飲んだアルコールは腹にしみわたり、自分達が生きているという現実感がすごくあったように思われた。

今、その友人と六万円のブランデーを飲み、たのしく一夜を過ごした。幸福であった。しかし、何かむなしさが心をよぎる。それは何か。私達は、寒い冬でも寒さをあまり意識せずに生きてゆくことが出来る。暑い夏でも涼しく暮すことも出来る。テレビをつければ世界中のあらゆることが放送され、膨大な数の本が、湯水のように出版され、知ろうとすれば知りたいことは殆んど知ることが出来る。しかし、本当に知らねばならないことは、何一つ分っていない。そういう時のむなしさ、豊かであるが故に、本当の価値を失った様に思われる時代のむなしさ、年をとればとる程、分らないことが多いということを知るむなしさかも知れぬ。

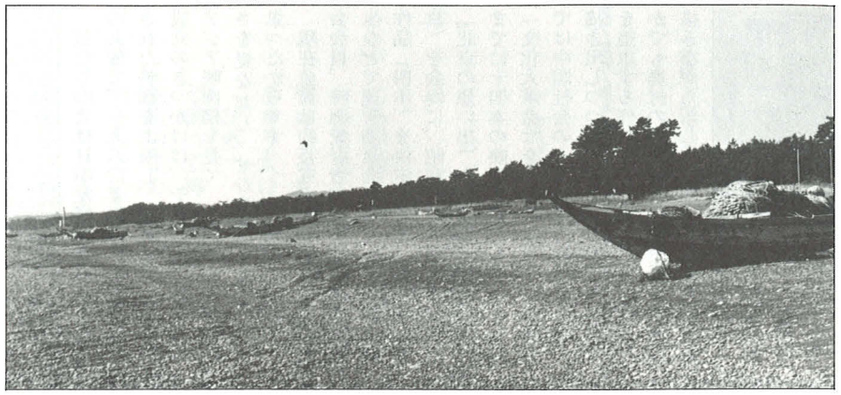
今年は一九八七年、後十三年で二十一世紀である。今から百年前、ヨーロッパはまさに前例のない物質的な繁栄があり、産業革命以来の工業の発展と、世界の植民地市場を得て、物質的な膨脹の絶頂にあった。豊かになった人々は、人類の進歩を信じ、高度の文明と、科学万能を誇った時代であった。

その頃、フランスにメソニエという画家がいた。官展サロンを牛耳り、名声、地位、権力を欲しいままにし、印象派の画家達をサロンに一歩も入れようとはしなかった。メソニエの「一八一四年」という作品がルーブルに買い入れられた。その時の価格は八十五万フランであった。その年、セザンヌの絵は、タンギ爺さんの店に置かれていたが、大きさは勿論ちがうけれど、値段は一枚たった百フランであった。それでも全く売れなかった。その年ゴッホは自殺した。

しかし、その時から百年もたっていない今では、その頃フランスで第一人者といわれたメソニエの名を知る人は少なく、歴史をささえているのは、セザンヌであり、ゴッホであり、その頃サロンから締め出された印象派の画家たちである。

新歌枕　琴ヶ浜

佐藤いづみ



網船が点在する琴ヶ浜

先だって新聞をみていると「白砂青松一〇〇選」の見出しで、その百の場所が紹介されていた。高知県では入野松原・種崎の千松公園などは周知のことだろうが、加えて「琴ヶ浜」（安芸郡芸西村和食）があり目にとまった。

数年前和食の芸西病院に一か月ほど入院していたころ、二度ほど歩いたことがある。

松原は国道よりも、海浜よりもぐっと高い丘状になった砂土道につづき、松原というより、松林ともいうより、力強い松の道という思いがした。よくぞ、こう長く、保たれつづいているとも感銘したことである。『土佐日記』（紀貫之）には―かくて、宇多の松原を行き過ぐ。その松の数いくそばく、幾千年を経たりと知らず。もと毎に波打ち寄せ、枝ごとに鶴ぞ飛びかう―と記してあるが、その他の汀線には多く触れない。今日、宇多の松原は名のみで―場所も岸本のあたりか―寥々とさびれのままだが、琴ヶ浜は青松というより、錆びて黒き幹が自在に生い繁っている。

この沿岸を航行して上洛したのだから貫之は琴ヶ浜を少なくとも遠望はしたにちがいない。

しかし、琴ヶ浜も今ごろ一〇〇選に入る位だから、昔は宇多ほど知名でもなかったろうし、和食・西分辺りなどには鶴の飛来もないただの青松帯だったかもしれぬ。

ところが、その琴ヶ浜を芸西村西分出身の医師藤戸せつ先生は「丘松原」と呼ばれる。海岸からぐっと丘のように高所に松原がつづくからという。地下（じげ）のかたの呼称らしく『地名辞典』にも琴ヶ浜のみで丘松原は見えない。

私は丘松原の名も気に入っており類のないものと大事に思うが、「琴ヶ浜」には実はゆかしい連想がある。佐竹本三十六歌仙中最高価値とたたえられる斎宮女御（九二九～九八五）に

琴の音に峯の松風かよふらし
いづれの緒よりしらべそめけむ

というのがあるが、私が琴ヶ浜の名を知った時、この歌がひびいた。

だから「あの浜の松かぜはあたかも琴の音のようにやさしく聞こえるでしょうね」とか「海べの別邸でお琴を弾いたかも―」などもっぱら、楽器の音色を想定しては感服し、浜の名の由来のようにたのしんでいた。どうでもいいとは思わない。言葉について考えてみることはおもしろい。そういえば、以前、海浜学校前という土佐電の駅もあり、東南の山上には琴風亭という料亭もあったなど思い出される。

こんなことをある席で話していると、芸西村和食出身というかたが「丘松原は、西分の浜のことで、東の和食・赤野あたりの浜を琴ヶ浜というのです。が、今はいっしょにして一帯を琴ヶ浜といい」琴ヶ浜の意味は「矢流から西の芸西村海岸をみると、丁度、琴を置いたように松原が見えますので―」と古人から聞いた旨を伝えて下さった。

浜の美しい松林の風情は、琴の音や、松風のひびきよりもさきに、そのものの形、体そのものだというわけである。楽音や松籟（しょうらい）などのようないわば間接ではなく、そのものに直接に琴を観じたということである。

矢流の松林の上の崖からの遠望を私は思ってみた。西のかた、大きく入りこんだ汀線に黒々と横たわる万松を、磯馴松群と見たて観じ、そのように呼びならわした強い詩心を思わずにいられなかった。あわせて、呼び名や地名にある潜在文化ということも――。

（『短歌芸術』主宰）

新しい中国映画を見る会

人生を描く中国映画

玉置　啓子

私たちの会は日中友好協会高知支部との共催で、一九八〇年以降に中国で制作された映画を上映し、鑑賞しています。設立のきっかけは、テレビで放映されたアジア映画祭を見て、中国映画の質の高さを見なおし、ぜひ高知でも見たいと思ったからです。

現在会員は約百五十人で、日中友好協会会員、映画愛好者、短大の中国語聴講生などで運営委員会をつくり、年間上映作品（四本）を決定します。名画座（写真）を会場に、昭和五十九年五月上映の『北京の想い出』をはじめ、今年の二月までに十四本の映画を上映してきました。「文化大革命」をのりこえた中国映画界では中国社会のもつ新旧の問題点を鋭く描き出しつつ、人間の真の幸福とは何かを追求する作品を作り出しています。なかでも農村の封建的な夫婦関係を淡々と描きながら新しい夫婦の愛情を見つめる『響音』や、黄土高原の極貧の村を舞台に新しい視点とリアリズムの映像に徹した中国映画の〝新しい波〟『黄色い大地』などの作品が印象的でした。毎回、近くの喫茶店で合評会をもちますが、主人公の生き方や中国事情、自然、風俗などについて自由におしゃべりができ、それがまたとても楽しいのです。皆に共通する感想は「中国映画はまじめに人生の問題を取り上げ、日本やアメリカの映画が失った原点がある」ということです。

今後の上映は『野山』『青春祭』『未亡人』『トンヤンシー・夫は六歳』などです。

（新しい中国映画を見る会運営委員）
連絡先　四三―六七九四

土佐自由民権研究会

第三回全国集会に向けて

藤原　和雄

私たちの研究会は、一九八一年十一月に、横浜市で行われた自由民権第一回全国集会を契機に、土佐の自由民権研究を広く深いものにしていこうと、その翌年の一月に発足しました。

外崎光広高知短大名誉教授を中心に、教員、公務員、会社員など会員は十五人で、各種講演会への講師派遣、民権史跡巡りのガイド、月一回の例会、会報の発行などを行っています。

一九八四年十一月の、第二回全国集会を記念して出版された『自由民権運動研究文献目録』（三省堂）の高知関係の部分は、私たちの会が執筆を担当しました。

現在は今年十一月に高知市で開催される第三回全国集会の準備で多忙な毎日です。今取り組んでいる大きな仕事に『自由民権七千日日表』の作成があります。会員がそれぞれ分担して、約三年がかりで土佐の民権派新聞を中心に文献を読み込み、この程やっとカード化が終りました。

また、今度の集会には私たちの研究会からも発表者を送りたいとその準備にも追われています。

この会の課題は、埋もれている民権運動の歴史を掘り起こし、研究をさらに発展させていくことです。将来は各自のテーマを集成した「民権研究論文集」を出したいと会員一同意気に燃えています。

自由民権に興味のある方の入会を心から歓迎します。また民権関係の資料があれば御一報をお願いします。

（土佐自由民権研究会会員）
連絡先　高知市民図書館　七五―九〇一八

女性建築士友の会

増える女性従事者

島田　晴江

建築業界も黄金期からオイルショック、安定期を経て、最近の円高へと環境は大きく変ってきています。建築に従事する女性の数も徐々に増え、最近では各地に女性建築士の集まりが生まれています。

私たちの会も昨年の一月に結成し、ちょうど丸一年が経ったところです。建築士の資格を持っている人だけでなく、「建築が好き」という女性の集まりで、現在会員は約二十人、大半は設計事務所に勤めています。

「目標は大きく、活動は地道に」をモットーに、偶数月に会報『ひな』（年六回）を発行、奇数月に勉強会や現場の見学会を行っています。

最近では高知大学理学部地球観測所（日高村）に行き、どんな観測が行われ、データがどのように利用されているのかなどを見学してきました。

会員同士の啓発、親睦も会の目標のひとつではありますが、社会に対して働きかけ、私たちの微力で一体何ができるのか分りませんが、暗中模索のなかで活動を続けながら、手応えあるものをつかんでいきたいと思っています。

ひと昔前なら左官や鉄筋工の手元（手伝い）ぐらいだった現場の女性従事者も、いまでは内装、塗装などの分野へ広がりつつあります。何十年か先にはヘルメットをかぶった元気な女性によってビルが建てられているかもしれません。

私たちはこの高知で仕事をしていくなかで、全国に誇れるような会にしていきたいと思います。

（女性建築士友の会副会長）
連絡先　七二―四一七四

朗読奉仕者友の会

福祉活動奨励賞を受賞

松田　光代

目の不自由な方の読書のために、昭和四十二年十一月に高知点字図書館が開設され、点字図書や録音図書が制作されてきました。昭和六十一年三月末現在で、県下の視覚障害者は四千四百六人、高知市内には千八十六人の方がいます。朗読テープの利用登録者は八百九十一人で、県内ばかりでなく近畿や九州地区にも貸出されています。（郵送が多く、ほとんどの場合無料、貸出し期間十五日）。

私たちの会は点字図書館が主催する朗読奉仕者養成講座（毎年九月～翌年一月）の修了生が、奉仕者相互の親睦と技術向上のために、昭和五十八年九月に結成しました。

現在、会員は七十六人、毎月一回の研修会ではNHK、RKC、市内の劇団の方々のご協力を得て、朗読の正確さを含めて良質なテープの制作に励んでいます。会員は点字図書館から機材の貸出しを受けて、朗読テープを制作しますが、本の選定や不明の字を調べたり、実際に読む時間の二～三倍の時間を要する地味な仕事です。

会の結成後四年目にして、読売新聞社「愛と光の事業団」より「福祉活動奨励賞」を今年一月に受賞しました。（写真）このように社会的に認められることは、地道な活動をしている会員にとって、何よりも嬉しいことです。

これからは、西日本奉仕者大会への参加や、念願の四国四県の朗読奉仕者協議会を結成することを目標に頑張っていきたいと思います。

（朗読奉仕者友の会副会長）
連絡先　高知点字図書館七二―二五〇一

こう君

小高坂小学校三年　横矢　裕

こう君はくっつき虫だ
いつも先生にくっついている
朝は、先生が車をおく所で待っている
きゅう食は一番先に先生に
「ひめ」
と言って持って行く
先生のすわったいすの後ろにまたがって
何をしているかのぞきこんで見ている
こう君は先生のくっつき虫だ
先生をひめだと思ってすきなのかな

風伯

寛容と後ろめたさ

苦しみに〳〵もがき、やっと書きあげた原稿が初めて不特定多数の前で活字になった時に、誇らしさもあったが、その反対に「後ろめたさ」があった。課題の設定、記述の内容、表現の方法など、そんな活字にかかわる全てのことに後悔と不安がつきまとった。

でも自分には、どうしてもこれだけのことは書きたかったのだからと、言いきかせておいた。その後になって、知人たちから批評をもらうことにもよって、後ろめたさが次の仕事へ何よりの活力になっていったように記憶している。

この頃、この気持ちが何んとなく希薄になりつつあることを危惧する。原稿用紙に向かっても苦しみを避けて安易さを求め、活字になったことには誇らしさを越えて、いやらしい〝優等意識〟さえが頭をもたげようとしているのではないか。まさに独りよがりの世界である。そうなれば誰からも関心の対象とはならないから、当然のこと、批評などえられよう筈もない。このような変化、いや変質の要因は何にあるのだろうか。

伝統を誇る「高知文化」の環境のなかで、後ろめたさの心を忘れることは最も忌むべきなのに、いつのまにか自分もその「大家」、「先生」に弟子入りを果してしまったのか。しかも、それを拒むことのできないのは、自分の「寛容」にあるのではないだろうか。

向上を希求するならば、たゆまぬ畜積を要するし、はげしい時間との競争がある筈だ。苦しみとか、後ろめたさはいつまでも大事にしたい。「寛容」なぞというものは厳しく払拭したい。

（草間）

立命館大学教授
木津川計氏講演会

テーマ
「言語の道はなお断たれるのか」
―地方文化の発展のために―

日時　三月七日（土）
　　午後四時～五時三〇分
会場　高知グリーン会館
　　（県庁前南）
　　二五―二七〇一
入場無料

本誌もおかげさまで号を重ね、寄稿や写真、カットなど何らかの形でかかわっていただいた方々も二百人近くになりました。今後とも幅広い市民の方々に参加していただき、高知文化のあり様を探っていきたいと考えます。つきましては下記要領にて文化講演会ならびに交流会を開催いたします。

講師には立命館大学教授木津川計氏をお招きし、方言を素材として具体的事例を交えながら地方文化の方向性についてお話しいただきます。

ぜひご来場下さい。

◆交流会　会場　高知グリーン会館
　　会費　五千円
　　時間　午後六時より

講演終了後、同じ会場にて交流会を行います。参加される方はお手数ですが、事業団までご連絡下さい。

講師紹介

木津川　計（きづがわ・けい）
一九三五年生まれ。大阪市立大学文学部卒業。現在立命館大学産業社会学部教授。一九六八年雑誌『上方芸能』を創刊、編集長兼発行人。著書に『文化の町へ』（大月書店）、『編集長のボロ鞄』（日本機関紙出版センター）、『上方の笑い』（講談社現代新書）、『含羞都市へ』（神戸新聞出版センター）。

第３回
高知の映像コンテスト入賞者発表

坂本巌さんの作品

第３回高知の映像コンテストは、写真部門69点、ビデオ部門18点のなかから、次の方々の作品が選ばれました。

〈写真部門〉

◆入選（13点）◆
白木友則（高知市）
田中一郎（　〃　）
立花一元（　〃　）
原　康晴（　〃　）
永井繁光（　〃　）
坂本　巌（　〃　）
浜口俊一（　〃　）
川西輝道（　〃　）
森田清一（　〃　）
溝渕博彦（土佐山田町）

◆佳作（13点）◆
澤谷福造（高知市）
田中一郎（　〃　）
立花一元（　〃　）
坂本　巌（　〃　）
片岡良相（　〃　）
浜口俊一（　〃　）
川西輝道（　〃　）
溝渕博彦（土佐山田町）
谷　次郎（安芸市）

〈ビデオ部門〉

◆奨励賞（２点）◆
福岡正志（南国市）
辻　和利（高知市）

◆入賞（５点）◆
橋田幹男（高知市）
辻　和利（　〃　）
浜町文也（春野町）
城建太郎（野市町）
藤岡安道（松山市）

◉なお、入選作品展を下記要領で行います。

期　間　４月６日(月)～４月11日(土)
会　場　NHK高知放送局ロビー
時　間　午前９時～午後５時
　　（最終日は午後１時まで）
展示数　写真26点　ビデオ７点

〈事業団の出版物〉

高知県方言辞典　土居重俊・浜田数義著
　　定価六〇〇〇円
土佐の芸能　高木啓夫著
　　定価四八〇〇円
明日を創る　大谷英二著
　　定価一〇〇〇円
おらんくことばてんこもり
　　定価　八〇〇円

◆当事業団の文化活動支援事業の一環として、四国四県の美術作家たちの作品を集めた展覧会「ニューエリア・熱き芸術家たち」が、一月六日から十一日まで郷土文化会館で開催されました。

◆地域の歴史の研究者たちを集めた「地域史研究者交流会」が、二月一日、中央公民館に二十二人の参加者を得て開催されました。

◆「個性ある街づくり」や「都市活性化の手法」など、市民を主体とした新しい高知文化の創造のために、皆さんのご意見、ご提言などをお聞かせ下さい。

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780 高知市本町五丁目二番三号
TEL（〇八八八）㉓四三六五
郵便振替　徳島８－１４８６９